

神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

イエスが鳴らす教会の鐘に応えるのはあなた



皆さまと主日のミサをささげるのも最後となりました。今週は「神のいつくしみの主日」と名付けられた主日です。長崎教区で転勤の絡む教会は、ほとんど、今週がお別れの説教となっていることでしょう。

福音朗読は復活のイエスが弟子たちに現れる場面、特にトマスにあらためて現れる場面が選ばれます。今日の説教、わたしたちすべてが神のいつくしみを感じるための助けになればと思います。

イエスがお亡くなりになった後、弟子たちは心を閉ざし、家の戸にも鍵を掛けて隠れるようにしていました。誰に従って生きていけばいいのか、何を頼りに生きていけばいいのか、全く分からなかったからです。

そこへ、復活したイエスが現れてくださいました。戸に鍵が掛けているのにおいでになったのですから、心理的・物理的、あらゆる形で自分を閉ざしていても、復活した主はおいで下さり、わたしたちを解放して下さることが分かります。

復活したイエスはすべてを閉ざしていた弟子たちに現れて、何を仰ったのでしょうか。いちばん印象的な言葉は、「あなたがたに平和があるように」(20・19)というものでした。この点に絞って、わたしの考えをまとめたいと思います。

復活した主がおいでになる前、弟子たちの心は不安でいっぱいだったでしょう。「不安」は「平安」がない状態です。どんな平安が奪い去られていたのでしょうか。何より、従っていく相手を失ったことです。エマオに向かう弟子たちは、次のようにイエスを言い表しました。「この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。」(ルカ 24・19) 誇りを持って、胸を張って従っていく。その相手を失ったのです。

従っていく相手を失ったことで、何を頼りに生きていけばいいのか、全く分からなくなりました。かつて2人ずつ組になって町々に出かけ、宣教しましたが、今はそのことも思い付きません。「わたしたちにも祈りを教えてください」(ルカ 11・1)と願って教えていただいた「主の祈り」を唱えてみることも思い付きませんでした。何かの抜け殻のようになっていたのです。

そこへイエスが現れ、「あなたがたに平和があるように」と仰いました。何もかも奪い取られ呆然としていた弟子たちに、復活したイエスが現れ、すべてを取り戻してくださったのです。弟子たちはこれまで通り従っていく相手を取り戻し、頼りにすべき道標を取り戻したのです。

イエスは「あなたがたに平和があるように」と言いました。すなわち、不安のどん底に突き落とされていた弟子たちを、まずは引き上げてくださったのでした。細かいことを言う前に、根本的な部分に救いの手を差し伸べてくださったのです。

「弟子たちは、主を見て喜んだ」(ヨハネ 20・20)とあります。喜びが満ち始めれば、あとは問題ありません。必要な指示を与えさえすれば、弟子たちは本来の姿に立ち帰っていきます。

心が喜びに満たされたところで、イエスは弟子たちに指示を出します。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」(20・21) 「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」(20・22-23) 弟子たちはもはや以前の抜け殻ではなく、よく準備された状態にすっかり戻っていたので、イエスの指示に耳を傾けることができたのです。

トマスは、イエスの最初の出現に立ち会うことができませんでした。それでも、トマスもその後のイエスの出現で「信じない者ではなく、信じる者に」(20・27) 変わります。トマスの中にも喜びが満ちて、「わたしの主、わたしの神よ」(20・28) と答える人になっていきます。

喜びが満ちあふれば、人は、イエスの証し人として十分働けるようになります。イエスの復活後の弟子たちがそうでした。同じことはわたしたちにも当てはまります。わたしたちの心が平安であり、喜びが満ちあふれているなら、イエスの証し人として働くことができるのです。

問題は、どのようにしてわたしたちが平安を得て、喜びに満ちた人になるかということです。答えは身近にあります。ふだんの生活で、当たり前のように実行していることです。「どこに、何があるかを知っていること。」これは信仰生活にも当てはまります。

わたしたちが信仰者として必要なものが、どこにあるかを知っているなら、当然そこへ行くことで平安を得て、喜びが満ちあふれるはずで、信仰者に必要なものは、どこへ行けば手に入るのでしょうか。疑いもなく、教会へ行くということです。「ここに、イエスさまのところに連れていきましょう」

教会は司祭の手を通して皆さんを招き、集会祭儀を開き、秘跡を授け、恵みを与えます。その最初の合図は、本来は教会の鐘だと思います。今、田平教会は鐘の修理が必要で鳴らすことができませんが、心の中では教会の鐘の音が聞こえていると思います。教会の鐘は始まりを知らせ、信仰者を集めるためです。

今から鳴らすのは、献堂百周年の頃に録音しておいた田平教会の鐘の音です。この鐘、修理が済めばいつか鳴らすことができるようになるでしょう。

そこで、皆さんへの置きみやげに、歌を歌って説教の結びとしたいと思います。「あの鐘を鳴らすのはあなた」和田アキ子さんの代表曲です。わたしがこの歌に込める思いは、信仰者を呼び集め、秘跡を執行して恵みを授ける、そのしるしとなる教会の鐘を鳴らす人がこれからもずっと必要で、鳴らすのはあなたですよ、ということです。

実際に鐘を鳴らしているのはシスターや数人の信徒だけですが、鐘を鳴らす人の背中を押し続けているのは皆さんお一人お一人です。イエスさまがあなたを教会に呼んでいますよ、あの鐘の音に応えるのはあなたですよ。そういう気持ちを込めて歌いたいと思います。

「あの鐘を鳴らすのはあなた」

作詞 阿久 悠

作曲 森田 公一

まもなく、新しい主任司祭がやってきます。次の主任司祭も、皆さんを祭儀に招き、秘跡を執行し、恵みを届けます。わたしも、新しい教会の鐘を鳴らすために、旅立ちます。

復活節第3主日(ルカ 24:13-35)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。